

わが国語教育実践からの課題

—— 野地先生への御祝詞に代えて ——

真 嶋 恒 雄

—— 始めに ——

これから書き記そうとする文章の中味は、私ごとばかりを述べることになろうかと思う。欠点だらけの手前自身のことを、人前にさらすことは面映ゆい。否、それどころか、まことに自分の厚顔無恥であることを、自らの手でそのまま承認することになる。しかも、わが師・野地先生の「還暦記念論文集」という暗れの冊子に、自分のことばかりをさらけ出すことは、非礼に当たるのではないかとも思う。

しかし、これらの事柄を百も承知の上で、野地先生や編集担当の方々の御要望と、「完全に（自己を）告白することは何人にも出来ることではない。同時に又自己を告白せずには如何なる表現も出来るものではない。」（侏儒の言葉）などという考え方にも甘えながら、思いつくままに幾許かの事項をまとめてみたい。

一、野地先生の御講義のこと

野地潤家先生に初めてお目にかかったのは昭和二十三年の晩春の頃であつたらうか。旧制広島高等師範学校の仮校舎（広島市出汐町、旧被服廠）の一室で、国語科教育法の講義の折であつたかと思う。

お歳は未だ二十八歳そこそこでいらっしやつたはずである。

当時の世相は、敗戦後の混乱のさ中であり、物質的にも精神的な面でも、窮乏を極めていた。私どもが学んでいた校舎、寮の建物一つを例にとつてみても、昭和二十三年三月までは旧海軍衛生学校（賀茂郡乃美尾村）の建物を、そのままわが母校の校舎に転用したとかいうものであり、教室のガラス窓の開け閉めもままならず、机や椅子も実に粗末なものであり、真に殺風景なありさまであつた。昭和二十三年四月、広島市内の出汐町校舎に移つたあとも、事情はあまり変りなかつた。

けれども、そのような状況の中にあつても、野地先生の御講義の様子だけは、それらの悪条件をどこかに吹き飛ばす程の内容であり、先生の熱情そのものを、私どもの心の奥底にまでひびきわたらせずには止まず——と言ふべきものであつた。

取り分け、今も私の脳裏に深く印象づけられている事柄を二・三列挙してみると、次のような事象が懐かしく思い出されてくる。

その一つは、私ども生徒一人一人の実情をしっかりと把握しておきたいとお考えになつたためであらうか。それぞれの「生い立ちの記」「生育歴」のようなものを作成するよう命じられたことであつた。又、大宰治の作品解説と関連させながら、特に彼の「富嶽百景」

に示されている例の「富士には月見草がよく以合ふ」の一節を、明晰な口調で、しかも朗々と読み上げられたこと。更には、太宰が従来の類型的な生活ぶりから脱却して、まじめに生き生きと生き抜こうと努めた時期のあったこと等を、額や鼻先に一杯汗をおかきになりながら、熱心に説明なさったことであった。私は文句無しに感動した。「太宰治という人はやはり偉いのだ。立派なのだ。」と思い込んだ。野地先生からこのお話しをお聴きしてからもう三十数年経過するが、このことだけはつい昨日のことのように、今も鮮明に思い出す。

二、私の研究授業失敗のこと

昭和二十五年四月、滋賀県立大津高等学校に赴任を命じられた私は、喜び勇んで同校に赴いた——と書きたいところであるが、現実とは異なっていた。実際には、六分の不安と何と何と野地先生のように生徒たちの心の奥底にひびくような国語の授業をしてみたいという四分の願いを胸に秘め、生まれてはじめて正式に高校の教壇に立つことになった。

同校は新制高校としての発足三年目を迎えていたが、生徒数の増加、教職員の不足、校舎・設備等の不備のために、極めて変則的な状況にあった。私の着任した同校西校舎には二年生だけが収容されており、一・三年生は東校舎（現在の県立膳所高校）に配属されていた。一、学級の生徒数五十五名〜六十名で十八学級編成であった。学校を取りまくいわゆる教育条件は、このように極めて劣悪な状況ではあったが、生徒も教職員も志気・学習意欲は非常に旺盛であ

った。第二次世界大戦中の抑圧によって内攻していた鬱憤を一挙に吐き出そうとする熱気のようなものが校内にみなぎっていた。

着任間もないその年の六月中旬、数名の新任教員を代表して、私は校内における国語の研究授業を行うことになった。教材は島木健作の「赤蛙」である。しかし、残念ながらその結果は明らかに失敗であった。うまくやりたい、皆をアツと言わせるような立派な授業がしてみたい——という気持ばかりが先行して、地道な下準備が、着実な授業展開の方法論的な研究がおろそかになっていたからである。むろん、私は私なりに、教育実習生であったころ教示を受けた型通りの「指導案」を作り、授業の進め方についても、かなり注意深く事前の準備は実施したつもりであった。

けれども、今にして思えば、私は、筆者島木健作がいわゆる「転向文学者」の代表的存在であると考へ、かなり軽視した気持を持っていたこと、「赤蛙」がその筆者の分身であると確信していたこと、「赤蛙」を死に至らしめた桂川の速い流れは、近代日本の歴史の流れの中における前近代的な封建制度の残滓の象徴であると勝手な解釈を下していたこと、等々の偏見・独善的な思考のために、折角の研究授業を、国語の授業というよりも近代日本思想史的な講義調のものに変形させてしまったのである。

三、私に負わせている課題のこと

この失敗が一つの重要な契機となって、私は私自身に向かつて色色のことを考え込むように仕向けていった。高等学校の国語教育に関連するその幾つかを、次に列記してみたい。

- ① 文学作品と呼称されるものの内で、「秀れた作品」とそうではないものとを、どのようにして見分けるのか。(教科書に記載されているから名品であるとは言い切れない場合があるから)。
- ② 文学作品の読み味わい方というようなものはあるのか。もしあるとすれば、その深い浅いの判断は、何を尺度にしてどのように測定するのか。
- ③ いわゆる「私小説」を読み味わうとき、「筆者」とその作品中の「私」と、その他の「人物あるいは動物等」との関係を、どのように理解すればよいのか。
- ④ 主として中・高校の国語の授業を参観すると、特に文学作品の指導の際には、⑦主題、⑧構想(筋)、⑨段落区分、⑩描写方法等という指導の型によって実施されていることが多いが、いつまでもこのような方法でよいのか。
- ⑤ ある文学作品が産み出されて来る際の時代背景や作者の経歴といったものは、予備知識として、生徒にどうしても記憶させる必要があるものなのか。
- ⑥ 言語とは何か。人間の意思、思想、感情等を他者に伝達させるための、唯単なる道具として割り切って考えるか。それとも時枝誠記先生等の所説のように考えるべきか。
- ⑦ 戦後のわが国の国語・国字政策は正しかったのか。もし正しいとすれば、現代の学生たちの大半が、日本の古典や漢文の読解に難渋している姿をどう理解すればよいのか。
- ⑧ ある生徒の国語の学力を測定する完璧な方法はあるか。
- ⑨ 現代社会の活字・読書離れの傾向を防止する有効な方法はある

か。

以上、課題内容の軽重、大小については無視して、順序不同の形で記述してみた。「解答らしいものが何も出ていないではないか。」との御批判があるかと思う。だが今は広島時代に学恩を蒙うした諸先生方の他に、直接御教示を賜った井島勉、植田寿蔵の各先生、それに、私淑申し上げている大先達としての深田康算、時枝誠記、大野晋の各先生、更に、文芸評論家としての、小林秀雄氏をはじめとして福田恒存、中村光夫、唐木順三、白井吉見といった方々の芳名を認めさせて頂くことで、おおよその私の考えの中味を御斟酌願えば幸いである。

—— 終わりに ——

比叡山延暦寺山内の一寺院にて生を受けた私は、病弱の伯父が住職として預かっていた三井寺山内の一貧乏寺院の経営を、昭和三十年一月から委任されることとなった。現に私どもの居住することの寺坊は、長等山園城寺(通称三井寺)山内の一角に在りながら、同寺から離脱して単立寺院となっているという、法律的にみても極めてややこしい(困難な問題が複雑に絡み合っていて容易に解きほぐせない)の意の問題を抱えている寺坊である。

他方では(むろん、こちらの方を私の本務と心得てはいるが)、普通科・工業学科・商業学科の各県立高校の教壇に立つこと満二十年、滋賀県教育行政関係の業務に従事することまる九か年、昨年(昭和五十四年)春から亦再び現在勤務中の普通科高校に復帰させて頂いている、という経歴を有する私が、漸くの思いでまとめ上げ

たのが、前記の通りのものである。

行い澄ました清僧・聖僧になることも叶わず、さりとて、今は亡き今東光和尚のように天台僧としての研鑽を積みながらも、一方で御発展というわけにも参らず、はたまた、ことし三月末御退職になったという超ヴェテランの大村女史のようにもなれず、我ながらまことに汗顔の至りではある。だが、恩師野地先生の御教示と我が祖師最澄・傳教大師の「照于一隅」の遺訓だけは忘却することなく、何とか精進を続けて行きたいものと念願している。

(滋賀県立守山高等学校教頭)